

明高 図書館 書

第83号

発行 明石高校図書館

ある本との出会い

教頭 藤井 俊

読み終えた分厚い本を一気に閉じる。そのとき手に伝わる柔らかで心地よい感触にその内容の満足感が加わり、新しい世界に踏み出すきっかけができる。

そんな最初の体験は小学校3年生の春休みだった。担任の先生に紹介された「僕らの町に竜がいた」というタイトルのハードカバー本を読んだ。当時、福島県の高校生だった鈴木直さんによる太古の巨大生物化石発見の記録だ。知らない漢字も多く、初めて読む

小さい文字の本だったので、読み進むのに時間がかかった。一日に二十ページほどのゆっくりしたペースで、一文一字を噛みしめるように読んだ。繰り返し読んだこともあって、当時読んだ内容を今でも良く覚えている。

鈴木さんは中学生のときに読んだ専門書から、地元近くに中生代白亜紀の地層(双葉層群)があることを知る。一億年前の恐竜が眠っているかも知れないと考えて化石探しを始めた。週末には自転車で片道二時間かけて化石採集の目的地に通った。地層の露出した川沿いを中心に一日中ハンマーを振った。高校二年生の秋、川岸の大きな岩に不自然に茶褐色を帯びた部分があ

るのを見つけた。それまで、よく目にしてきた植物化石かと思つて掘り進めると、大きな動物の背骨らしき化石に行き当たった。自分では手に負えないと思い、東京の国立科学博物館に手紙を送った。「背骨らしい化石が双葉層群に続いています」驚いた博物館の小島郁夫さんは、脊椎動物担当の長谷川善和さんとともに福島に向かった。「日本では首長竜や恐竜などの中生代の大型爬虫類の化石は発見されない」と考えられていた常識を覆す大発見の始まりだった。発掘された恐竜は海に息する首長竜の一種で、フタバズキリユウと命名された。

この本を読み終えた日から化石の虜になった。当時日本中の化石山地の場所と地層の年代を調べようとした。兵庫県にも化石の産地があることを知ってワクワクした。小学校五年生のときの作文にも将来は古生物学者になりたいと書いていた。初めて自分の手で化石を掘り当てたのは小学校六年生の夏休みだった。父親に頼み込んで連れ

て行ってもらった岐阜県瑞浪市の川原で、汗だくになって掘り出した八センチほどの巻き貝の化石は、今も綺麗で、とうに成人した長男のコレクション箱に納まっている。

フタバズキリユウは、発掘後三十八年経った平成十八年に、ようやく新種の生物であることが確認され、学名「フタバサウルス・ズズキイ」が発表された。このフタバズキリユウは実際には恐竜とは区別される仲間の生物であるが、ドラえもん映画「のび太の恐竜」に登場した。まさに、子供の夢を育む竜だった。

中学、高校、大学そして教職についてからも、そのように影響を強く与えてくれる本にときどき出会った。そんな体験の積み重ねは、自らの前に現れるチャンスから幸運を生み出す大切な糧だと思っている。



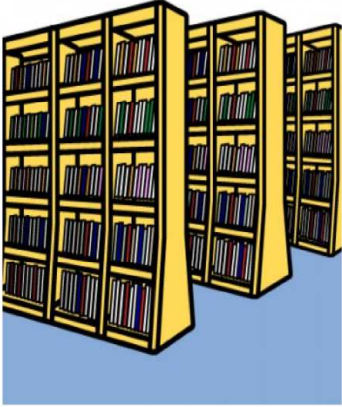
令和二年度 校内読書感想文コンクールについて

新型コロナウイルス感染症の影響による夏休みの短縮等の処置があり、読書感想文の課題提出を自由提出としました。その中でも三作品の参加がありました。

来年度は、従来通りの読書感想文コンクールが開催できれば良いと考えています。

常日頃からの読書への親しみ、その書籍（多様な世界）に対する理解と感動、そしてその理解と感動を人に伝えるという「読書感想文」への取り組みは、若い皆さんにも意味深いものとなると思います。

まずは、常日頃からの読書への親しみへの第一歩として、本校の図書館を利用してください。



令和二年度 兵庫県高等学校総合文化祭文芸部部門

散文部門 優秀賞（二位相当）

明石高校 1年 [redacted] さ

んが受賞しました。創作作品としてお楽しみください。

『出会い』

これは、僕がまだ大学を卒業してすぐらしい話。

今でこそ僕はファミレスの店長なんかをしているけど、当時の僕は、ずっと志していた小説家という夢を諦めて、何をするでもなく、生活のためにバイトに明け暮れて、日々を怠惰に過ごしていたように思う。

そして、僕がバイトをしていたファミレスの七不思議に『火曜日木曜日さん』というのがあった。七不思議といつてもお客様だから表立ってそういうことを言うと失礼に当たるけど、バイトの先輩たちの間では、もうそのときには、すっかりそのあだ名で定着しているらしかった。

その名の通り、火曜日と木曜日の夜にだけ来る、ミステリアスな女人。ずいぶんと綺麗な人だというのがまた怪談らしさに拍車をかけていて、その詳しい素性を知っている人はいなかった。

ただ、毎回同じものを頼んで、料理が来るまで、原稿用紙の束と向かい合っている。ボンゴレ・ビアンコと、メロンソーダ。最初に火曜日木曜日さんを見たときは『こんなに綺麗な人がメロンソーダなんて子どもっぽいものを頼むんだろうか。』と思ったのだが、その噂は本当だった。

「あの束、小説だよ。」
「いつだったか、先輩が、隠し事を打ち明けるように、そっと僕に囁いた。」
「もしかしたら、なんかすごい作家なのかも。」

それはバイトのメンバーの間でまことしやかに囁かれている噂だった。「お仕事は何をされているんですか。」と聞いた勇氣ある先輩は何人もいたのだが、その度に「自営業です。大したものではないですよ。」と

小さな声で返されただけで、それ以上の追求はできないでいた。

本当は、お客様にあれやこれやと話しかけるのも、あんまり良くないらしかったのだけど。

「ほら、今日も来た。」

もうすぐ夏だというのに黒いパーカーを羽織って、色あせた細身の黒ジーンズを穿いている。季節感のない奇異な服装が、人の目を惹く。長い黒髪を下ろしているのが、ずっと昔に読んだ怖い話に出てきた女の幽霊を彷彿とさせた。

とても綺麗な顔をしているのに、長い髪に隠れてよく見えないし、細い体躯をひよこりと猫背にしている、いかにも不健康そうな印象だ。

これが、『火曜日木曜日さん』の「いらっしやいませ。おひとり様ですか？」

先輩がにこやかに声をかけると、火曜日木曜日さんはちよつと驚いたように顔を上げて「はい。」と言った。大体いつもここいら辺、という席に案内されると、彼女はメニューを一

瞥もせず、いつも通りのものを頼んだ。

「ボンゴレ・ピアノをひとつ。それから、メロンソーダでお願いします。」

接客をしながら、つつい聞き耳をたてる。ハスキートーンで少しかすれた、聞き心地の良い声だ。注文し終わった火曜日木曜日さんは、カバンから原稿用紙の束と万年筆を取り出して、何やら書き始めた。

横をとおりながら、ちらりと覗き見る。

『彼女の長い髪が、風になびいた。日の光を反射したそれは、この世の何よりも美しく見えた。それは身内びいきからくる、幸人の気のせいだったのかもしれないが。』

端正な文字で流れるように書かれていく文章を見て、僕はようやく一人で納得した。火曜日木曜日さんは、どうやら作家をしているらしい。

僕の諦めた夢をこの人が追っているのかもしれない。そう考えると、心のどこかで応援するような気持ち

が湧いてきた。

「お待たせいたしました。ボンゴレ・ピアノと、メロンソーダになります。」

「はい、どうもありがとうございます。」

同僚が料理を運んでいくと、火曜日木曜日さんはほんのちよつとだけ微笑んで、軽く頭を下げた。

「ごゆっくりどうぞ。」

火曜日木曜日さんは、そつと手を合わせて「いただきます。」と呟いて、フォークを手を取った。

そうして、ゆつくりと。パスタをフォークに巻いて、ゆつくりと食べる。食べながら、たまに原稿をぺらぺらとめくる。そうしてふと、間違えたらしいところを直す。ときおり小さく口を動かして、文章を読みながら確認しているようだった。

その日、火曜日木曜日さんを見たのは、それきり。気付くと彼女はもう食事を終えてしまったらしく、同僚が食器を片付けていた。

「毎度、すげえ綺麗に食べんの。」

厨房を担当している先輩が、そう言って笑った。ボンゴレ・ピアノの皿

とメロンソーダのグラスが一緒に運ばれてきたら、それで彼女が来たと分かるらしい。

そんなことが、数年ほど前から続いていた。誰も火曜日木曜日さんの正体は知らないし、何をしている人なのかも、誰も分からない。

どうやら、物書きをしている人らしい。

それだけが、彼女について知り得る、僕たちの唯一の情報だった。

「今どき原稿用紙って、珍しいよな。」

「確かに。もしかして機械に疎いのかも。」

バイトを終えて帰路に就くときも、なんとなく火曜日木曜日さんの話をしてしまう。それくらいに、彼女の存在は、うちの店にとって大きくなっていた。

ときどき、火曜日木曜日さんはいつも使っている万年筆のインクを切らして、不機嫌そうにカバンをまさぐって、代えのボールペンで原稿を書いていた。どうやら、愛用して

いるらしい万年筆には、並々ならぬ愛着があるものらしい。

あるいは、資料らしい写真の上にメロンソーダをひっくり返して、静かに一人で慌てふためいたりしていた。どうやら、彼女は予想外のハプニングに弱いらしい。

そんな彼女の新しい一面を見る度に、僕はほんのりむずがゆいような、不思議な気分になった。

そんなことが続いていた、ある日のこと。

「はーあ、今日は特に忙しかったなあ……。」

独り言をこぼしつつ、家の鍵を開けて、中に入る。

電気のスイッチを手探りで探し、靴を脱いで、カバンをそこいらに放り出す。そのままの流れでテレビをつけると、見覚えのある顔がぱつと映った。

「あれ、これ、あのじゃん。」

独り言を言って、テレビの前に座る。いつもより少し化粧つけのある火曜日木曜日さんが、画面の向こうで、フラッシュの眩しさに目を細めて

いた。

『今回の新人賞を受賞されたということ、やはり、作品を書くのは苦勞されたのですか?』

『そうですね、今回は推敲を何度か重ねまして、二度ほど書き直しました。』

少しかすれたハスキートーンは、今は緊張しているのか、少し上ずっていた。でも、間違いない。火曜日木曜日さんだ。

『書く際に工夫された点などはありますか?』

『ええと、様々な年代の方たちに読んでいただきたいと思ひまして、簡潔に、共感しやすい心理描写を心がけました。』

テレビの向こうにいる火曜日木曜日さんは、なんだかとても遠い人のような気がした。週に二度も顔を合せて(向こうはこちらの存在を知らないのだけど)いるのに。

テレビの画面が切り替わり、番組の司会者が、小説のあらすじの紹介を始めた。高校を舞台にした、恋愛

をテーマにした小説。

『私も読んでみたんですけど、すごいキョキンするんですけどね。なんかこう、登場人物に感情移入しちゃうというか。』

最近人気のタレントが、感想を述べていた。恋に奥手なヒロインに親近感が湧く。主人公が一途で応援しなくなる、などなど。

「……明日、本屋でも行くかな。」

眩いてみる。なんだか、今日が記念すべき日のように感じられた。

次の日、駆け込むようにして開店直後の本屋に入り、平積みにされた山から、残り少なくなった本を手にとった。帯にでかかど『新人賞受賞』と書かれている。

漫画の棚なんかも少しうろうろして、レジに並びながらぱらぱらとめくってみる。

あ、この一文、前に見たことある。

そんなことを考えながら、流し読みして、著者の経歴のところをしてみた。

某書店新人賞、受賞。ただそれだ

け。この小説が、火曜日木曜日さんの最初の一作目なのだ。

この小説を書いている火曜日木曜日さんを身近に見れたのだという優越感と、そんな小説がもう色んな人に読まれてしまうのは嫌だと思ふ、ほんのちよつとの独占欲。

その日はバイトの時間になるまで、家でじっくりその本を読んだ。

夕方になってからバイトに出ていつものようにホールで注文を取る。その日も忙しかったから、指示があればレジにも入った。

からんからん、とドアが鳴る。

「いらっしやいませ。」

言ってから、はつとした。

いつもの黒のパーカーに、色あせた細身のジーンズ。そして、前は短かったのに、前下がりに短く切り揃えられた黒髪。なんだかさっぱりとしてしまつて、別人のような気がした。しかし、雰囲気は分かった。

火曜日木曜日さんだ。

「おひとり様ですか。」

「はい。」

「では、お席にご案内します。」

いつもの席、いつもの風景。なのに、なんだか何かがいつもと違う。今まで見てきた火曜日木曜日さんが、とんでもなく遠い世界に行つてしまつたような気がした。

「ご注文お決まりになりましたら……。」

「あ、決まっています。ええと……ボンゴレ・ビアンコと、メロンソーダ。それとあと……。」

いつも言われていないことを言われたからか、火曜日木曜日さんは少し戸惑つたように言った。少し言葉を切つて、卓上に置いてあるメニューの表紙を見る。

「コーヒージェリーの、パフェを……まだ時期は、終わってませんよね?」

「ああ、はい。では、ボンゴレ・ビアンコがおひとつ、メロンソーダがおひとつ、コーヒージェリーの、パフェがおひとつ……それでよろしかったでしょうか。」

「はい、お願いします。」

注文を取り終わつて別の卓に向か

いながら、ふと気付く。

火曜日木曜日さんと会話したのは、今日が初めてだった。

あのコーヒーゼリーのパフェは、彼女のささやかな自分自身へのお祝いなんだろうか、なんて考える。

それからまたあちこちに注文を取りに行ったり、レジ打ちをしたりしているうちに、火曜日木曜日さんが会計をしに来た。

きつちり金額分を払う火曜日木曜日さんの財布が今どき珍しいがま口で、それにまた僕は驚いたりした。「こちら、レシートになります。ありがとうございます。」

そんな定型文を口にしながら、レシートを渡す。

「ありがとうございます。美味しかったです、ごちそうさま。」

彼女は、笑顔でそう言った。その言葉は、その日聞いた誰の言葉より、僕の中にすっと沁み込んだ。

次の日から、彼女はふつりと来なくなつた。

待てど暮らせど、全く来ない。そ

のうちにだんだん彼女の存在は風化していつて、「ああ、そういえばいたねえ、そんな人。」といったような扱いになつてしまった。

そんなある日、大学時代にお世話になつたゼミの教授の退官祝いに、OBたちで集まってパーティーを開くという案内が来た。

久々に教授に会うという嬉しさと、当時目をかけてもらっていたのこのうのと夢を諦めてしまったという申し訳なさを胸中にぐるぐるとさせながら、僕は会場となる大学の記念ホールに向かった。

教授の退官記念のスピーチの後、皆で祝杯を挙げた。久々に会う教授はまだまだ元気そうで、「お前のやりたいことをやればいい。」と励ましてくれて、それがまた嬉しかった。

「そういえば、お前が書いた卒業論文、あつたろう。今のゼミ生がそれを読んで、すごく目を輝かせていたよ。よつぽど新しい視点をもらえたんだろう、それを参考に小説を書いていたんだが、とうとう賞なんか

取つて。」

けらけらと楽しそうに笑う教授に、僕は驚いて聞き返した。

「賞を取った、ですつて?」

「おう、取つたよ。結構大々的にニュースになつた。お前は顔を見たことがないだろうから、分からないだろうけど。」

そう言つて教授は、一人の生徒を手招きして呼んだ。「あの論文を書いた先輩だよ、お前会つてみたいと言つてただろう。」なんて言いながら。

そうしてやつてきた人物に、僕は息を呑んだ。

火曜日木曜日さん。

向こうも何やら思うところがあふらしく、僕の顔を見てぴたりと動きを止めた。

「……ファミレスにいた、店員さん……ですよね?」

なんともへんてこなその問いかけに、思わず吹き出す。

「ええ、そうです。」
「なんだ、面識、あつたのか。」

「いえ、あるというか、ないというか……。」

「僕がアルバイトをしてるファミレスに、よく来ていたんです。」

「そういうことか。なら、あとは二人でゆっくり話すといい。俺は席を外すから。」

教授が去つてから、火曜日木曜日さんはあたふたと「急にすみません。」と謝りつつ、僕に次のような言葉をくれた。

「私、先輩の論文を読んで、小説家になろうと思つたんです。先輩の書いてらした、心理描写に関しての論文、とつても分かりやすく。ありがとうございます。」

火曜日木曜日さんは、そう言つて深々と頭を下げた。

「ごちこそ、僕の論文を読んでくれてありがとうございます。」

それから僕は、彼女と同じように小説家を志していたこと、挫折してしまつて夢を諦めてしまったことなどを話した。

彼女は、じつと静かに聞いてくれ

た。ときおり相づちをうって、本当に真摯に聞いてくれた。

慰めるでも、同情するでもなく、ただただ静かに聞いてくれた。

「……僕、駄目だなあ。初めて会ったのに、こんな重い話するなんて。」

自嘲気味にそう言って頭を掻くと、火曜日木曜日さんはぶんぶんと首を振った。

「そんなことないです。先輩は、私に新しい世界をくれたんです。勝手に、こんなにすごい文章をかけてしまふのだから、私のことを青二才ってバカにされてもおかしくないかも、って思ってたんです。」

飾り気のないその言葉に、僕は思わず彼女の顔を見た。真剣な目をしていた。

「でも、お話を聞いて、先輩がとても身近な人に感じられた。今日は会えて良かったです。」

その心強い言葉と、柔らかい笑顔、僕はなんだか急に、手放したくなくなってしまうた。

この出会いを、ここだけで終わら

せたくなくなってしまうた。

それから僕はまた頑張ってみようと思った。彼女が頑張っているのだから、僕も何か努力をしないとと思うて。

それでひとまずはバイトを精一杯頑張っていたら、いつの間にかやらフアミレスの店長にまでなっていた。

そして、今に至るといいうわけだ。

このエピソードは僕の話の鉄板ネタになってしまつて、最近小学校に入学した娘も、よく僕にこの話をねだる。

僕も可愛い娘にねだられてしまつては弱いから、ついつい話してしまふ。それを先日、うっかり妻に聞かれてしまった。

「私、そんなあだ名で呼ばれてたんだ。」

妻はにやりと笑つて僕にそう言うてきた。

その瞬間に、長年大事にしていた秘密をついっかり聞かれてしまったような、とんでもない気まずさを感じたのは、ここだけの秘密だ。

令和2年度 明高祭ビブリオバトル大会

本年度もビブリオバトル大会は明高祭（文化祭）初日に開催の予定でした。

しかし、新型コロナ感染禍の影響で、明高祭自体が中止をせざるを得ませんでした。

来年度は、感染禍沈静化のもと、是非とも校内ビブリオバトル大会を実施したいものです。

その際は、一般生徒（参加者が定員数に満たない場合は前期図書委員（2年生）の参加を募ります。奮って参加してください。

令和2年度 明高秋季ビブリオバトル結果

令和2年11月18日

(発表順)

- 1. ■■■■■ (1-1) 『レ・ミゼラブル』
- 2. ■■■■■ (2-1) 『夜行』
- 3. ■■■■■ (2-1) 『阪急電車』
- 4. ■■■■■ (1-6) 『紫式部日記』

司会者 ■■■■■ タイムキーパー ■■■■■

*運営に当たっては後期後期図書委員にお世話になりました。

☆チャンプ本は『阪急電車』に決定：発表者の■■■■さんは県大会出場(R2年12.26県立図書館)しました。



【令和2年度 図書蔵書費 収支報告】

令和3年2月現在

収 入		支 出	
令和元年度より繰り越し金	495,610		
普通預金利息(8月分)	2	朝日新聞代(R1・10月～R2・3月)	22,374
図書蔵書費(1年)	127,520	前期 生徒図書費	36,210
図書蔵書費(2年)	123,120	前期定期図書費(雑誌)	42,705
図書蔵書費(3年)	138,320	神戸新聞代(4～9月)	21,168
		朝日新聞代(4～9月)	22,374
		後期 生徒図書費	85,205
		後期定期図書費(雑誌)	39,312
総収入合計	884,572	総支出合計	269,348
令和2年度への繰り越し金見込み(3月現在)			
総収入合計(884,572)－総支出合計(269,348)=615,224			

- ※1. ・支出について、後期生徒図書費は2月16日で今年度分を締めている。
 ・追加請求分の後期生徒図書費は3月中に請求される予定である。
 ・神戸新聞(10～3月)は3月中に、朝日新聞(10～3月)は5月中に請求される見込みである。
- ※2. ・県費による図書購入費は、別途の扱いである。

上記の内容で間違いのないことを確認した。

令和3年2月16日 会計監査

図書館 書籍購入について

上記のように、本年度も図書館書籍の購入をすることができました。購入費については生徒のみなさんからの出費(学
年費)によってその費用がまかなわれています。ご協力あり
がとうございます。

本校図書館では、その時期に合わせた新刊本を中心に、購
入書籍を選んできました。図書館に足を運んでもらえれば、
気になる一冊に出会うことができると考えています。

また、購入にあたり、みなさんの希望を反映させる方法も
考え中です。何らかの形で具体的な提案をしたいと思えます。

(明石高校図書室)



令和2年度 図書貸出ランキング (1/31 現在)

1位	作業療法士になるには	(濱口豊太)
2位	アニメーションの色職人	(柴田育子・保田道代)
2位	コンビニ人間	(村田沙也香)
2位	ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー	(プレイディみかこ)
5位	流浪の月	(凧良ゆう)
5位	本当の貧困の話をしよう	(石井光太)
5位	人魚の眠る家	(東野圭吾)
5位	マンガでわかる世界史	(祝田秀全)

令和2年度 個人貸出ランキング (1/31 現在)

1位	■■■■■	(2-8)	20冊
2位	■■■■■	(1-1)	18冊
3位	■■■■■	(1-1)	13冊
3位	■■■■■	(3-3)	13冊
5位	■■■■■	(3-3)	12冊
6位	■■■■■	(1-5)	9冊
6位	■■■■■	(3-9)	9冊
8位	■■■■■	(2-3)	8冊
9位	■■■■■	(3-2)	7冊

図書室の魅力

後期図書委員長

二年

「本」は生活の中に良質の感動をもたらしてくれる媒体の一つだと思います。私は、中学時代に教師から森見登美彦さんで小説家の本おもしろいよ、とすすめられ、『夜は短し歩けよ乙女』を買って読みました。語呂の良いタイトルと表紙の魅力で手にしたのですが、そのときの私には、そこに何らかの既視感があったのを覚えていません。

その「既視感」ですが、図書室でたくさん本のの中に囲まれていると、様々な作者とタイトル・表紙を手がけるイラストレーターその他の作品などが頭に浮かぶことがあります。なんだか懐かしいような親しいような感覚に包まれるのです。そこで読み始めた本のおもしろさも増すように思ったりします。皆さんも是非このような「既視感」を味わいに図書室をご利用ください。



編集後記

令和3年1月末日。いまだ、新型コロナウイルス禍はおさまる気配もみえません。暗澹たる思いが世間に蔓延している中、この後記の素案を考えています。

今年度世間では「ウイルス関連本」が多数読まれたと言われます。ウイルスに対して、人類の戦いの歴史。そしてそこからの反省と希

望。本校の図書室にも関連本は意識的に多く購入しました。みなさん、手に取ってもらえたでしょうか。

ところで、人の生活の中で、書籍の果たす役割は重いものがあります。有史前、「文字」が出現し始めた頃、「文字を用いて記録を残すことは、人間の記憶能力を劣化させるものだ」と非難されることがあったそうです。新しい文化が始まろうとするとき、得てしてこのようなことはよく起こります。

さて、この世に「文字」が本当に存在しなかったら、自分の経験できないことをどのような手段で知り得ることができでしょうか。そして、そこからの思考はどのように進めることができるのでしょうか。幸い、この世には「文字・書籍」は存在します。どうかみなさん、本校の図書室に足を運び、あなた以外の人の思い(世界)に触れてみてください。お待ちしております。

(文責 山田)